

高島市

歴史散歩

No.27

朽木谷の木地屋と道具

中世ごろから昭和初期にかけて、櫛（くし）を用いて木製の櫛、丸櫛、盆、鉢など、主として丸物と呼ばれる木地物を製作した職人は、木地屋・木地師・櫛師・櫛工・櫛師などと呼ばれて、全国で活躍しました。彼らは、材料となる良質な木材を求めて山地帯を移住することが多く、朽木の「木地山」のように、木地屋が居住していたと考えられる地名は全国各地に残っています。



とくに滋賀県は、木地屋発祥の地とされ、木地屋の祖神として仰がれる文徳天皇第1皇子の稚鸕鷀（ひこさぎ）王にまつわる伝承や資

料なども県内各地に多く残されています。また、それらの調査を続けた高島市出身の故橋本鉄男先生は、木地屋の調査・研究に先鞭をつけた民俗学者として全国的にその名を知られています。

朽木の木地屋の活動については、元禄2年（1689）に貝原益軒が記した紀行文『西北紀行』に「朽木の町にて、挽き物（注：木地物のこと）をつくり、漆にてぬる櫛盆などあり。」という記述があり、早くから朽木周辺で木地製品が造られていたことがわかります。ただ造られていた場所は「朽木の町」と一言で表現されていますが、実際は、木地屋と呼ばれる職人は櫛師村（現在の木地山）などの山間部に住み、漆師と呼ばれる漆職人は、岩神村（現在の岩瀬）に住んでいたようです。

朽木谷一帯で木地屋たちが使用

した道具や製作した木地物は、現在、市教育委員会が保管され「朽木の木地屋用具と製品」として昭和59年に滋賀県の有形民俗文化財に指定されており、その一部は、朽木資料館で展示されています。

（文化財課）



編集後記



今年の冬は、こんな景色がちよつと寂しくなる天候です。
（マキノ高原のメタセコイア並木）

▼ボカボカ陽気に誘われて、顔を出したフキノトウも農え上がった節分寒波。積もった雪はアツという間に消えてしまいましたが、雪はいつも、見慣れた景色を驚きに交えてくれます。▼今月のまちネタ写真館では、1月末にチャレンジした「フクシー・トレッキング」の様子をご紹介します。美しいフナ林と眼下に広がる景色に魅了され、たどり着いた山頂には1m近い雪が、いつもなら2m以上の雪があつて、初心者ではとても近づけないとが、尾根伝いにしばらく歩いてから振り返ると、歩いてきた足跡だけが真っ白な雪の上に残っています。なんとも気持ちの良い瞬間です。国産報告で、21世紀末に地球の平均気温が8.4度上昇するとの予測がでました。このまま温暖化が進むと、21世紀末には、国内でフナに遡した土地の9割がなくなるとの試算も。この高島も例外ではありません。この自然を守り、次代に引き継ぐためには、これまでを振り返り、人間活動の深刻さについて、と真剣に考えないと、もう間に合いません。

（広報担当）

R100

PRINTED WITH SOYINK

16年ぶりに再現！ 三重生「うしの祭り」

安曇川町三重生神社の春の祭礼を俗に「うしの祭り」と呼んだのは、第26代継体天皇の父、彦主人王が祭神であることに由来すると、祭礼で実際に牛を引いたからだとも言い伝えられています。

祭りは、かつての日程では4月1日、神事番(当屋)で配役の「籤取」に始まって、16日は「精進風呂」、17日は「宵宮」で神御供などが調えられ、その後神社へ「宵宮渡し」と「宵宮番」が行われます。そして、18日早朝は丑の刻(午前2時)の「宵宮起」があり、いよいよ「本祭り」に入ります。巳の刻(午前10時)から神事番で配役の「千鳥の杯」の後、祭列が生まれ、本社への「渡り」となります。

途次御旅所の神事を

経て、本殿の「神御供上げ」、拝殿前の「粽撒き」、「神牛神馬の宮巡り」が終わると、これで「引上げ」といって下向します。翌19日は神事番で神御供の氏子への配分をして、直会の「神御供栄し」を行って終了となります。



御旅所 祭列

配役では特に戸童(※神霊の依り憑いた童子)の午の守・丑の守が祭神の象徴として注意を引きます。

現在は、宵宮が4月28日、本

祭は4月29日に行われており、特に本年は継体天皇即位1500年の記念ということで、中止されていた本物の牛・馬が登場する「神牛神馬の宮巡り」が16年ぶりに神社や氏子の方々の熱意で再現されます。

なお、見学にお越しの際は、三重生神社付近には駐車場がありませんのでご注意ください。

(文化財課)



てんぐの舞い

編集後記



つくしが天を仰いでいます。春です。(新旭町針江の湖岸にて)

▼春になったり、冬になったり、今年の天候は予測できません。でも、土手に伸びるつくしが「春ですよ」と語りかけています。よきによきと伸びる姿に、生命の力強さを感じます。▼今月の表紙は、3月14日に今津東小学校で行なわれた「いのちの授業」の様子を紹介しています。「十歳のきみへ」の著者である「日野原医師の授業を受けたい」という子どもたちの願いが、この日、現実のものとなりました。「命ってどこにあるの?」との間に、「心臓!」と答えるのは子どもたちだけにあらずで、改めての問いに、命のモーターを「命」そのものと思ひ込んでいたことに気づかれます。命はあることは分かっても、どこにあるかは言えないもの。でも、私たちは、その見えない命を時間という形で使っています。生きていることは、自分が自分らしく時間を使うこと。「自分で自由に使える時間を、何のために、誰のために使うか」人生の大きな宿題です。(広報担当)

歴史散歩

No.41

「安曇」の地名が語るもの

高島市のアトの地名は、古くは奈良時代に編さんされた『万葉集』に「足利」「阿」「阿波」「足波」「阿波」などと書かれて登場します。これらはいずれもアトと発音されていたと思われますが、現在の「安曇」という字がいつごろから使われたものなのかは明確ではありません。ただ新旭町安井川の川原市には安曇川沿いにかつて「安曇」という小字があり、聞き取りなどによると、この「安曇」は安曇川をはさんだかなり大きな広がりをもった土地の名前であったともいわれています。

「安曇」は一般的には「アツミ」と読まれることが多く、それは、古代の部（職掌を分担する集団）の一つである海人部を統率する氏族の名称であると考えられています。

す。海人部は、海辺に住んで漁をする人々の集団のことです。安曇（阿曇）氏も海や水にかかわりの深い氏族であったことが推測されます。

「アツミ」に由来する地名は全国に残っており、高島市の「安曇」のほかでは、有名な長野県の安曇野や、福岡県や鳥取県で古代の地名として伝わる「阿（安）曇郷」、

福島県の「安曇郡」、石川県の「安曇見」という村名などがあります。また高島市安曇川町青柳には「安曇」という小字があり、これも「アツミ」関係地名の一つであるとも考えられています。

これらの地名の中には、やはり安曇氏との

かかわりを伝えるものもあり、また川や海など水辺にかかわるものもあります。こうした各地に残る「アツミ」地名と、高島市の「安曇」との直接のかかわりは明確ではありませんが、どちらも安曇氏または海や川など水辺にかかわる地名であることは推定できます。

一説に、「アツミ」の元の意味



▲安曇川河口

は海であり「アト」の名は「アツミ」が転化したものといわれていることから、高島市の「安曇」は川や水にかかわりの深い多くの意味を持つ地名であるということができそうです。（文化財課）

経緯後記



春の風が吹き抜け、里山に影りを添えています。（花：カタクリ）

▼春の訪れとともに花の便りも賑やかに、色とりどりの草花は、見慣れた景色を特別なものに変わてくれます。春の息吹は、心をワクワクさせてくれますね。そして、これから本番の春祭りも。▼高島の豊かな森林の魅力をより深く、そして楽しく体験できる学校が開設しました。今月の表紙は、4月5日、くつせの森に開設した「高島森林体験学校」の様子をご紹介します。開校式の後に行われた記念植樹では、「アジサイ」やヤマアジサイ、アマチャなど合計400本の苗木を、100人でホトラ山（シバや薪を採る山）に植えました。アジサイは、七変化とも呼ばれるように、日ごとに色が変わり、見るたびに新しい感動を与えてくれます。体験学校も、多彩なプログラムで、訪れるたびに新しい感動を与えてくれるそうです。魅力あふれる高島をフィールドに、地元の人々の案内で、素直の自然に触れてみませんか。（広報担当）

江戸時代に全国ブランドの「朽木盆」！

朽木産の塗物類は、江戸時代を通じて、將軍・大名から一般庶民にまで、その存在を知られるとともに、広く愛用されていました。

なかでも、朽木盆や菊盆とよばれる丸盆は、黒・朱・緑・茶色の地に彩漆で菊をはじめとする草花・鳥蝶・山水を描いた意匠に特徴があり、素朴さの中に雅味を漂わせていることから大変人気を博しました。

朽木塗は、江戸時代初頭から幕末まで、数多くの俳諧指南書・地誌・紀行文・小説など幅広いジャンルに登場していることから、朽木盆が全国有名ブランドの地位を獲得していた様子がわかります。その主なものを紹介します。

『俳諧当世』

延宝3年（1675）、芭蕉が3歳のときに江戸で詠んだと思われる「盆の下ゆく菊や朽木盆」の句を載せる。

『柳久一世の物語』

井原西鶴の好色物で、貞享2年（1685）に刊行された。柳久とは実在の大坂堺筋の商人、柳屋久右衛門のことで、豪遊の果てに家財をなくし、貧窮孤独のうちに精神錯乱を起こして水死したという。物語上巻の中で、柳久が旅芝居の花川順之助宅を訪ね「朽木盆に盃を置き、飛魚のむしり肴

をこしらえて置いてあるが、こちらへ出さないのは、酒を買ってくるのを待っているらしくて滑稽である。」という条に見える。

『反古庵茶之湯留書』

江戸前期京都の茶人藤村庸軒（1613～99）が催した茶会の記録。庸軒、名は源兵衛、反古庵と号する。古田織部・小堀遠州に師事し、千宗旦より密伝を得る。後に藤堂家の茶室となった。貞享2年（1685）12月3日の茶会中の会席の項に「香の物クツキ挽物二入」、貞享4年（1687）11月24日の項に「クツキ細工挽物二香物クキ細二切ふりて」の記事を載せる。

『西北紀行』

儒者・本草学者・教育家であった貝原益軒が、元禄2年（1689）正月に京都を出発して、丹波・丹後・若狹を巡った旅をつづった紀行文。巻之下「朽木の町にて、挽物をつくり、漆にてめる椀盆などあり。漆多ければ也。京都へ出し、諸国にうつる。」との記事がみえる。

『日本鹿子』

多年の旅行経験をもつ磯貝舟也が著し、元禄4年（1691）に刊行された地誌で15巻12冊から成る。その中の巻七の近江名物の条に「朽木塗物 盆・鉢・五器」の記事がみえる。

『雲州名物』

松江藩主、松平出雲守治郷（不昧公）の名物茶道具類所蔵品台帳で、名称、種類、伝

来、買上年、取扱商人、購入価格などを載せる。宝物之部に「鑲の菊、朽木盆、石川宗雲・井筒屋十左衛門久嘉・三井、寛政年間（1789～1800）、京都加賀屋作左衛門、千六百五十両・位金（相場の見）二千五百両」との記事がみえる。

この他にも朽木塗物のことを載せた江戸時代の文献は数多く存在していますが、これらからわかることは、17世紀すなわち江戸時代前期の刊行物に記されたものが圧倒的に多いということで、朽木塗物が江戸や大坂のみならず全国的なブランドを確立した時期であり、同時に大名から庶民階層にまで愛用されていたことを立証するものと言えます。

（朽木村史編さん室）



▲菊盆とも呼ばれる朽木盆、菊のほかに草木・鳥蝶・山水などを描いた

編集後記



豪華絢爛。
高島の錦秋絵巻。
（朽木小入谷で）

▼朝方、道路脇の温度計にひと桁の表示の日が見られるようになり、山々の木々が一気に色づき始めました。良い紅葉になる条件は、台風の影響がなく、夏の日照が十分で、紅葉直前によく冷え込むことだそうです。今年は10月末現在で台風の上陸がゼロ。鮮やかに色づき、深まりゆく錦秋絵巻が楽しみです。▼「きれいな道をみんなの手で!!」今月の表紙は、11月9日に行われた「藤樹の里あどがわ花いっぱい運動」一斉作業の様子をご紹介します。この日は、49の事業所や団体、市民ボランティアなど約2500人が、来春、一面に菜の花を咲かせるための作業を行いました。「ミミのボーイ捨て防止と藤樹先生のふるさとをアピールしよう」と、バイパスの本線建設予定地1万平方メートルに花苗の植え付けなどの取り組みが始められて8年。これまでの活動が評価され、今年、「高島市未来に誇れるまちづくり活動実践大賞子ども大賞」を受賞されました。「継続は力なり」で、その力の結晶が花開き、私たちの心を和ませてくれているのですね。（広報担当O）

歴史散歩

No.49

「鯖街道」の最短ルート

ねこりとうげ
根来峠

根来峠

高島市の西北端にあたる朽木針畑地域の小入谷と福井県小浜市の上根来を結ぶ道は、小浜で陸揚げされた鯖を始めとする海産物を京の都へ運んだ数ある「鯖街道」の中の最短ルートとして知られ、昭和初期ころまでは、荷物を背負ったたくさんの人が行き交ったといわれています。県境の峠は、根来峠・根来坂と呼ばれ、最近では中央分水嶺・高島トレイルの主要ポイントとしても紹介されることが多くなっています。



たもので、石に刻まれた文字からは、寛政9年（1797年）に針畑の住人である林彦大夫の書写・埋納によって建てられた一石一字塔であることが分かります。

また、峠をこえた福井県側には、小さなお堂に祀られた地蔵と山中には珍しい井戸があります。井戸には弘法大師がその場所を人々に教えたという言い伝えが残り、かつては多くの旅人ののどを潤したであろうことが想像できます。人の往来が多かった時期には、井戸の隣に茶店があったともいわれています。

峠には、祠にまつられた地蔵と「大乗妙典 一石一字塔」と記された細い自然石が建っています。一石一字塔とは、偏平な子石等に経文を書写して埋めた場所に建てられ

一方、滋賀県側の峠の入口には「焼尾地蔵」と呼ばれる地蔵が祀られています。この



根来峠の井戸

焼尾地蔵の名前は、昔、針畑の村人が峠越えの途中で、この地蔵に「おれの家を燃やすことができるか」と挑発すると、村人が帰るまでに自分の家が火事になっていた、という伝承から名付けられたものといわれています。針畑の人々は、それ以来この地蔵の霊験を信じ、大切に守り伝えるようになったといえます。

このように、峠やそこに至る峠道の周辺には、峠を開いた人や峠道を通った人々の信仰にかかわる文化財がたくさん残されています。それらからは、電車や車のない時代に、荷物を背負って山道を行き来した旅人たちの、峠を無事に越えることができるようにという切実な思いをうかがうことができます。（文化財課）

編集後記



いよいよウィンターシーズン到来！
（箱館山スキー場で）

▼市内4スキー場のトップを切って箱館山スキー場が12月6日オープンしました。それに先立ち行われた安全祈願祭には、地元小学生などが招待され、色とりどりのウェアに身を包んだ子どもたちがひと足早い雪遊びを楽しみました。雪の便りは聞くものの、まだまだスキーをするまでの積雪が望めないこの時期、自然雪まで待てないスキーヤーやスノーボーダーが楽しめるのも造雪機さままでです。▼このところ毎年のように取り上げられる異常気象、暖冬、そして雪不足。地球温暖化によって、スキーなどのスノースポーツをする環境が徐々に悪くなってきました。雪が必要なスポーツだからこそ、その変化には敏感になるスノースポーツ。もっと多くの方が雪に接して、自然の動きを敏感に感じ取るようになれば、地球温暖化への意識がさらに高まるのではと思います。いつまでもスノースポーツが楽しめる地球を守るためにも、毎年雪が降ることに喜びを感じられるような、自然への感性を持ち続けたいです。（広報担当O）

江戸時代に全国ブランド パート② 「高島硯」

安曇川と鴨川にはさまれた阿弥陀山から産出する粘板岩は、近年の発掘調査等の成果により、平安時代の終わり頃から現代まで「高島硯」の原石として使われてきたことがわかってきました。

江戸時代の記録である「硯材史」には「高島石」には、玄性と虎斑の2種類があつて、きめが滑らかである」ことが記されています。硯石をよく観察すると

灰黄緑色のやや軟らかめの粘板岩で黒い柳葉状の斑がみられるものと灰青黒色の硬い粘板岩で虎斑紋と呼ばれる黄色い斑がみられるものの2種類があり、前者を玄性石、後者を虎斑石と呼んでいたことがわかります。

▶ 硯作りの様子（大正初期）



また江戸時代の高島硯の裏面には、硯を机面に安定させるためにここにされた覆手と呼ばれる浅い内割りがみられます。この中には所有者名や年号などのほかに「高嶋石」「本高嶋上石」「極上本高嶋石」「高嶋青石」「本高嶋虎斑石」「高嶋虎斑石」など「高嶋」の銘をもつ様々な刻字がみられます。

虎斑石はその中での特選品を指すわけですが、班の字は斑の誤りで、生産地で誤った字を刻むわけがありませんでした。持ち主が自分で刻んだと考えられます。これらの硯は江戸や京都を中心に、北は北海道の松前藩陣屋跡、南は兵庫県池田藩姫路城下の武家屋敷跡などから出土しています。大溝藩の領

主分家の文書には、近郷の商工業者に硯石の採掘をまかせて雑税を納めさせていたことや、「掘出す石は皆本藩のものなり」などと記されており、江戸時代には大溝藩の専売品として、朽木藩の「朽木盆※」と同様、全国ブランドとして流通し、「高嶋」と刻むことでより高級感を演出することが流行していたと考えられます。

（文化財課）

※高島市歴史散歩No.48

2008年12月1号で絶介

▶ 江戸時代の高島硯の裏面



編集後記



高島の若者よ、未来を拓け！
（高島市成人式で）

▼小正月の1月15日、今津北小学校で児童や隣接する保育園児らが参加して、新年の恒例行事「左義長」が行われました。今津北小学校の左義長は半世紀以上も続く伝統行事で、雪が降りしきる中、児童らは燃え上がる炎に、今年1年の安全と、書道や絵の上達を願いました。▼1月15日といえば元「成人の日」。今年は、平成生まれが初めて成人式を迎えました。1月11日、高島市では675人の「平成成人」が誕生し、旧友たちと親交を深め、これまでの歩みを振り返りつつ、大人としての一歩を踏み出しました。「裏方で一生懸命に自分たちを支えてくれていた人たちがいてくれるからこそ、表舞台に立てることを忘れてはいけない」と、一部の若者にそんな思いを抱いたものの、不況の荒波を吹き飛ばしそうな華やかな新成人たちの表情に、力強さと未知なる可能性を感じました。

（広報担当）

歴史散歩

No.52

岩神(朽木岩瀬)の將軍御所

戦国時代、京都での戦禍を避けるため、室町幕府の12代將軍足利義晴(あしかが よしはる) (1511—1550年)と、その子13代將軍足利義輝(あしかが よしひる) (1536—1565年)は、三度にわたり計8年間、朽木荘に滞在しました。この間、朽木荘で幕府の運営が行われたことから、これを「朽木幕府」といっても過言ではありません。

1527年、細川家の内紛を機に、幕府の政権を総轄する管領職の細川高国(はな のくに)に對立して、阿波国(あわのくに)(徳島県)の細川晴元(はな のはると)が前將軍義植(よしのえ)の養子義維(よしのぢ)を擁立しました。晴元の軍勢が阿波から上洛してくると、翌年5月、將軍足利義晴は近江坂本へ落ちました。その時の軍勢は2万人でした。そして9月8日に、坂本から朽木荘へと移動してきます。義晴を護衛してきた六角氏の軍勢1万は、これを見届け湖東へ帰りました。

18歳の若き將軍義晴は、なぜ朽木の地を選んだのでしょうか。それは、いざという時、日本海へ出て、味方する勢力のいる北陸や山陰へ抜けることのできる地点を選んだためでした。そして何よりも、

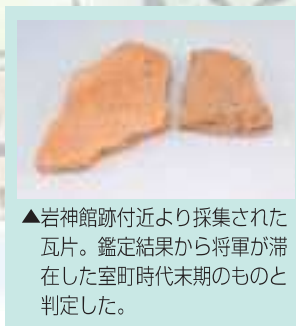
朽木荘の領主朽木氏や、西佐々木七氏の面々が、將軍義晴の親衛軍である奉公衆であつたことによります。

義晴は、1531年2月1日までの2年半を、朽木荘で過ごします。義晴には、公家衆と將軍側近の「外様衆・御供衆・御部屋衆・申次・番方・奉行・同朋・御末衆」といった者たちが付き従っていました。現在、30名の人名が確認でき、これはほんの一部と考えられます。彼らには、それぞれ供の者がいたであろうから、相当数の者が、將軍の滞在した岩神館(現在の興聖寺)周辺の、朽木谷一帯に滞在していました。この間、岩神館には、京都から勅使(天皇の意思を伝える使者)が来たり、また頻繁に寺社や公家の使いが訪れ、幕府の政庁としての役割を果たしていました。

義晴はその後、湖東の六角定頼の援護により3年後に入洛します。朽木植綱は、この時の將軍への忠節により、義晴から絶大な信頼を得て側近となり、御供衆や内談衆という重席につくこととなりました。

足利義晴の子義輝は、1546年に將軍宣下を受けました。しかし、1551年2月10日、三好長慶との不和により、朽木荘へやってきました。時に義輝は16歳で、翌年1月28日までの約1年間、朽木荘に滞在します。この時の滞在は12名が残存史料から判明し、これも一部と考えられます。その後、一時上洛を果たしますが、1553年8月30日に再度、京都の騒動を避けるため朽木荘へやってきます。この時の滞在は長く約4年の滞在了。なお、義輝は朽木荘を去って7年後、三好義継・松永久秀らにより、京都で暗殺されてしまいます。

(朽木村史編さん室)



▲岩神館跡付近より採集された瓦片。鑑定結果から將軍が滞在した室町時代末期のものと判定した。

編集後記



春呼ぶ炎 芽吹き誘う

▼琵琶湖の春の風物詩である「ヨシ焼き」が、針江のヨシ群落で行われました。「ヨシ焼き」は、雑草種子や病害虫を除去し、芽吹きを促すことを目的に、毎年3月初め頃に行われています。ヨシは、水辺に生えるイネ科の1年草で、水の汚れを吸い上げて体をつくります。たった1年で3メートル以上になるヨシ。1本あたり年間約1トンの水を浄化できるそう、この浄化システムを保つために、「刈り取り」「火入れ」という人の手が必要になります。4月は新芽が勢い良く伸び始める季節。再び芽を出したヨシがまた汚れを吸い上げて成長していきます。▼春は人生の門出に臨む季節でもあります。新1年生が期待と希望に胸ふくらませ新生活をスタートさせます。初々しい新1年生の姿を見ると、初心に帰る思いで元気が湧き上がってきますね。積み重なった心のよごみを浄化してくれるのかもしれない。

(広報担当O)



広報たかしま

(平成21年4月1日号)

第88号

発行／高島市

編集／企画部秘書広報課

〒500-0001

滋賀県高島市新旭町北畑5の5番地

☎0740(210)8-030

http://www.city.takashima.shiga.jp
tinfo@city.takashima.shiga.jp

剣熊関の役割

けん くま せき

お知らせ
拡大版

タウン
トビックス

暮らしの
情報

みんなて
575

消費生活
省エネ長者

教育委員会

健康生活

びょういん
だより

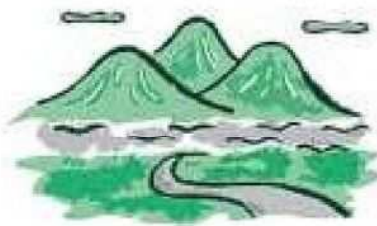
国保年金

図書館

窓口だより

歴史散歩

江戸時代は交通の整備が特に進んだ時代で、東海道・中山道などの江戸を起点とする重要な幹線道路のほか、脇街道（脇往還）と呼ばれる主要道路の整備が全国的に進められました。こうした街道沿いには、宿駅や一里塚、橋や渡船場といった施設が設けられ、街道を通行する人の数は飛躍的に増加するようになりました。このため、幕府は全国の治安維持のため、要地に関所を設け、街道を行き交う人々の取り締まりを行いました。関所は「入鉄砲・出女」を改めるための公の施設とされ、原則的には幕府が定めた以外の私的な関所の設置は禁止されましたが、



実際には、諸藩の領内支配のため「番所」

「口留番所」と呼ばれる関所相当施設が各地につくられました。

軍事・交通上の要衝であった近江国周辺には、古代から鈴鹿関・不破関・愛発関・逢坂関などの関が置かれたことが知られていますが、江戸時代になると、古代の関とはまた違った役割を持つ新たな関所が、近江国内に設置されるようになりました。近江国と北陸を結ぶ北国海道（現在の国道161号）沿いにあたるマキノ町野口集落北端の山裾に置かれた剣熊関は、江戸時代中期に記された『近江輿地志略』によると、「専ら女人ノ出入ヲ改ムル公儀ヨリノ御関所」であったとされていて、幕府によって置かれた公的な関所の一つであったことがわかります。また「東海道新井関所ノ格ニ似タリ」と、東海道沿いの主要関所である静岡県の新居関の格に似ていることが記されています。新居関所は、徳川家康が

慶長5年（1600年）に創設した東海道の重要な関所として知られ、現存する唯一の関所建物として国の特別史跡にも指定されています。剣熊関は、この新居関と似た機能と規模をもっていたようで、北国海道沿いで重要な役目を担っていたことがわかります。また、同じ『近江輿地志略』には関所として「三上喜兵衛」の名前がみえ、これは幕末まで関守を務めた三上氏の一族であることもわかります。関所の場所には、明治維新後も三上家の役宅が残っていたと伝えられ、かつては周辺にも土蔵や見張所など関所にかかわる施設が立ち並んでいたようです。

現在、関所跡には「剣熊関之跡」と書かれた石碑と、小さな地蔵が祀られた祠があり、恐らく関所は、この位置から北の山裾に広がっていたものと思われます。関の創設年代は、明確にはわかっていませんが、江戸時代の記録には「剣熊御関所」や「野口御番所」として登場しており、恐らくは江戸時代の早い段階で、北国と近江国を行き交う人々や荷物改めのために、幕府によって置かれた重要な関所であったと考えられます。（文化財課）



◀ 剣熊関跡

編集後記

昨日まで寂しかった所に、突如、淡桃色の花が開く。こぼれるように咲き誇る桜は、私たちの心を魅了してやみません。約600本の桜が延長約4キロにわたって美しい花の回廊をつくる海津の桜並木は、昭和6年、当時道路の修路作業員として働いておられた宗戸清七さんが、自費で植樹したのが始まりと言われています。3年後から花をつけ始めて75年。今年もたくさんの桜人を魅了し、思い出を重ねました。桜には、その瞬間、その時の感情で、人それぞれの桜があります。「さまざまのことを思ひ出す桜かな（芭蕉）」この春、愛でた桜は、どのように映りましたか。（広報担当O）



全国的に類例のない謎のダム遺構

いわがみえんてい

「岩神堰堤遺跡」

日本では年間降水量が多いわりには河川が短いため、古代から灌漑用溜池が発達してきました。

しかし、それらの多くは瀬戸内海周辺の平野部に分布しており、ここで紹介するような谷池（山にある池）については、その歴史や構造が十分



▲岩神堰堤遺跡（手前は洪水吐）

に解明されているとはいえません。

当遺跡は、朽木岩瀬にある興聖寺の北側を流れる小彦谷川を、西北西へ800m遡った地点に土砂を盛って築かれた貯水用堰堤で、西北端には許容量以上の水を吐き出す洪水吐（オーバーフロー）を設けています。

堰堤は全長48m・高さ7m・天端の幅3m・最大基底幅24mの規模を有し、断面は台形となっています。

明治7年（1874）ごろに作成された絵図には、青色で着色された谷池が描かれており、当時は貯水機能を果たしていましたが、明治29年（1896）の洪水によって決壊し、堰堤の南東側半分を消失しました。

江戸時代の天和年間（1681〜84年）に著された総合的農書である『百姓伝記』には、堤を築く際には根敷（堤の下部の幅）を広くし、法面はなるべく緩傾斜にし、馬乗

（天端）も広く作ることが肝要であると書かれています。

岩神の堰堤もこれらのことに配慮して作られており、さらに水流による浸食を防止するために、かつては法面全体に石積みがされていたと思われます。日本における石垣研究の第一人者である北垣聰一郎氏の調査によると、3期以上の工事が確認され、特に中段付近が最も古くて江戸時代以前のものであることが判明するとともに、他に類例のない貴重な文化財であるという見解が出されました。

堰堤の創建年代の特定は難しいようですが、江戸時代の新田開発もしくは興聖寺の移築にともなうものか、あるいは室町時代に当地一帯にあった

たとされる将軍仮御所に関連する施設なのか、多くの謎に包まれた遺跡です。

（朽木村史編さん室）



編集後記

子どもたちが待ちに待った夏休みが始まりました。学校生活から離れる夏休みは、とかく生活のリズムが崩れがち。夜更かしなどで生活リズムを乱してしまうと、体内時計はすっかり狂ってしまいます。この体内時計、約1日周期で「睡眠」「運動」「食事」といったすべての生活リズムを調節し、体のさまざまな器官は、この体内時計に合わせて活動しています。本来全自動で精巧な体内時計も、それをきちんと作動させるには「朝日を浴びること」が必要です。朝の爽やかな陽の光を浴び、体内時計の狂いをリセットするなら、朝のラジオ体操がお勧め。ラジオ体操出席カードを励みに、この夏は子どもたちと一緒にラジオ体操。いかがですか。

（広報担当〇）

『民具』

くらしと共に歩んだ道具たち

民具とは、私たちが日常、生活の必要から製作あるいは使用している器具・道具の総称で、人の生活の成り立ちや移り変わり、日本の日常の伝承文化の形や特質を知る上で欠くことのできない民俗資料のひとつです。

第二次世界大戦後、昭和30年代の技術革新は目覚ましく、耕運機の発達の結果、田畑から牛馬耕が姿を消し、2000年の伝統を持



▲民具の体験実習（千歯扱き）

それぞれの民具には地域によって、構造や呼称の違いがあり、文化の伝わり方や地域的特性を物語っています。このことから、収集に当たっては収集する地域のありのままの姿に目を向けることが必要となります。

民具は決して華やかなものではなく、使い勝手を追求し、時代の流れ、営みの中で工夫・改良が見られ、手直しや修理を繰り返し大切に使われたモノもあります。私たちの祖先が、生活の必要上から創意工夫をこらしてきた生活体験の結晶で、血と汗の染みこんだ生活の歴史を代弁してくれるものです。

高島の民具

高島市も、数多くの民具を収集し、保管、展示しています。その一部の民具が各資料館に展示されています。

○ 朽木資料館

朽木に残る文化財を中心に山仕事の道具や生活用具を展示し、^{かんど}杵人の歴史と文化を伝えていきます。特筆すべきは、県指定有形民俗文化財に指定されている「朽木の木地屋用具と製品」（江戸・明治）で、「手挽き口クロ」ほか、朽木盆（菊盆）をはじめ椀、片口が展示されています。

☎(38) 23339

○ マキノ資料館

農林水産業で暮らしを営んできた先人の知恵と苦労を知り、次代に引き継ぐと「稲作の昔と今」、「山の仕事」、「村の行事」、「くらしとその道具」に関連する民具やエントランスには、在原地区の民家の囲炉裏端がジオラマ展示されています。

☎(27) 1484

○ 高島歴史民俗資料館

「昔のくらし」コーナーが設置され、ちゃぶ台、テレビ、ラジオなど多くの生活用品を並べ、昭和30年代頃の居間を再現しています。

昨今、民具等を使った回想法は、高齢者の保健・医療・福祉の分野で介護予防や地域における生きがい活動、世代間交流等に利用されています。なお、資料館では、これらの民具資料を、学校、社会福祉協議会、JA、各種団体等に貸出しを行い、利用していただいています。

☎(36) 15533

（文化財課）

編集者のつぶやき

▼明けておめでとうございます。今年もどうぞよろしくお願いいたします。
▼表紙は、高島保育園のもちつき大会の一コマ。おめでたい時はやはりお餅ですね。私も餅つきをさせていただいたところ、日ごろの運動不足がたたり筋肉痛に…。情けない限り。近頃、例に漏れずお腹がでてきたこともあるので、今回の特集記事に習って、今年こそは適度な運動を習慣づけたいと思います。まずは近所のウォーキングから始めてみます。（広報担当S）